1993.1
第12号

博物館だより

大津市歴史博物館

近江名所図（大津市歴史博物館蔵）

あけまして おめでとうございます

輝かしい新春をお迎えになられたことと存じます。平素は大津市歴史博物館に対して格別のご厚情を賜り厚くお礼申しあげます。

おかげさまで平成二年十月二十八日に開館して三回目の新年を迎えることになりました。開館以来多くの関係者のご協力を得て常設展示「大津の歴史と文化」の充実、そして企画展として地域に密着した展示と国際的な幅広い分野における展示といった二つの構想を基本に開催し、四年十一月末で一九万三三一四人を数えています。いっぽう、大津の歴史と文化の普及推進のために特別記念講演会八回、五十二回に及ぶ土曜講座をはじめとして歴史教室や歴史文庫の発刊なども実施してきました。

ことしの企画展として五月一日から「伝説の歌人・小野小町」展、七月二十八日から「琵琶湖の船」（仮題）、九月二十九日から大津市制九十五周年記念特別展「古代の宮都—よみがえる大津京」（仮題）などを考えています。本年も多くの人々に親しまれる開かれた博物館をめざして、館員一同力を傾注する所存ですので、より一層のご指導をいただきますようお願い申しあげます。

大津市歴史博物館館長　木村至宏

収蔵品紹介⑪

刺繍近江八景袱紗

縦七九・〇センチ、横四八・七センチ

江戸時代（文化～天保頃）

近江八景をテーマとした作品は、屏風・巻物・掛幅・版画といった絵画をはじめ欄間等の彫刻、盃・硯箱・文机等の漆器、大皿・八寸などの陶磁器、着物などの染織品といった様々なものがあります。

近江八景は、室町時代後期に流行した中国の「瀟湘八景」を背景として、近江を訪れた詩僧などの文人に見出されました。その後、江戸時代の初頭・十七世紀前半にいたってに近衛信尹らの当時の文人たちの選定によって定着し、現行の「近江八景」になったといわれています。また、当初の和歌や詩文としての対象から絵などの装飾・意匠の分野でも十八世紀以降盛んに使われ、前述したような分野で多様な作品が生まれていきました。ここで紹介する「刺繍近江八景袱紗」もそのような中で製作されたものの作品の一つです。

さて袱紗には茶の湯に用いるもの、進物等をおおうもの、祝儀袋等を包むものなどいくつかの種類があります。この「刺繍近江八景袱紗」は、縦長の方形の大きいもので、四隅に白絹の房を付けていることから、進物や器物のおおいとして用いられたものであることがわかります。しかも、きらびやかな金糸を多く用い、かつ、末広がりの「八」にあやかった近江八景を意匠にしていることや裏地に緋縮緬を使用していること、さらに、唐崎の「松」が大きくデザインされていることなどから、祝い事や飾りに用いられたものと思われます。

これらのことからこの袱紗は、当時の人々の近江八景に対する意匠としての意識や用いかたの一端をうかがい知ることができる資料でもあります。

この袱紗の図柄の近江八景は、縦長の紺の地に、上方右上に白糸で比良山をあらわした「比良暮雪」、その下に浮御堂と雁行する雁をあらわした「堅田落雁」、その右下に帆を降ろして係留された船のある矢橋の港をあらわした「矢橋帰帆」、上方左上に石山と紅葉の石山寺をあらわした「石山秋月」、中央には白壁の映える膳所城と粟津の松並木をあらわした「粟津晴嵐」、その左下から中央にかけて粟津からつながるかたちで瀬田唐橋と中の島をあらわした「瀬田夕照」、それらの右には波を金糸であらわした琵琶湖を隔てて、長等山と桜の三井寺・鐘楼をあらわした「三井晩鐘」が配され、下方には大きく金糸で唐崎の松と雨、色糸で唐崎社をあらわした「唐崎夜雨」が配されています。

以上のようにあらわされた「近江八景」は、地理的な位置にはとらわれずに、八景それぞれの表現と袱紗の意図する用いかたを意識した配置が行われ、この袱紗全体としての一つのまとまった近江八景の図柄・意匠をかたちづくっています。

また、これらの刺繍には、上記の金糸等のほか、緑、青、茶、朱、黄緑など二十種余の色糸を用いて、さし繍、平繍、駒繍、まつり繍などの刺繍の各手法がもちいられ、例えば、石山や長等山は色糸を平繍で、唐崎の松は、金糸を駒繍でといったように、色彩と刺繍の変化をもたせているほか、金粉も散らされ、よりきらびやかなものとなっています。

（西川丈雄）

「長安の秘宝展」閉幕

平成四年九月十二日（土）から十月十一日（日）まで、日本中国国交正常化二十周年を記念して、日中文化交流協会、日本経済新聞社との共催で、『シルクロードの都―長安の秘宝展』を開催し、好評のうちに終幕を迎えました。

本展は、シルクロードによる文化交流の中心地・長安（現在、中国陝西省都・西安の古称）の繁栄を、陝西歴史博物館、西安碑林博物館、昭陵博物館、西安市文物園林局、臨潼県博物館、陝西藍田県文物管理委員会に所蔵されている前漢・後漢・北魏・北周・隋・唐時代の作品のうち、未公開作品を含めた一〇六点によって紹介するものでした。特に漢代の代表墓である揚家湾漢墓や唐時代昭陵の陪葬墓などから出土した俑や唐三彩などの陶器、さらには西安何家村出土の銀壺など精緻な金属工芸品、仏教美術の中から慶山寺出土の舎利容器などが注目を集めました。

会期中、滋賀県内在住の方々をはじめ県外からも中国の美術工芸品に興味を抱く多数の来館者がありました。また、九月十九日（土）には、「昭陵の陪葬墓とシルクロード」と題して、京都造形芸術大学教授田辺昭三氏の講演会が開催されました。氏は、中国の遺跡の最新情報をスライドをまじえて紹介され、聴講者全員が魅了されていました。さらに九月二十六日（土）には、「中国の都城遺跡」と題して、随展組の張崇信・向徳・韓钊の三氏と本館の吉水眞彦が、西安の遺跡を中国語を交えて紹介しましたところ、通常とは一味違う講座となり、質問も相次ぎ大変和やかな雰囲気となりました。会期中の観覧者数は、九、一〇二名でした。

ものです。今回、古文書には逐一現代語訳などを付けましたが、観覧された方々は熱心に目を通していただいたようで、当館としても喜んでおります。

こういった展示とともに、戦国時代を実感していただこうと、宇佐山城跡（近江神宮背後の山城跡）の見学会や火縄銃の射撃公演、記念講演会なども開催しました。特に十一月三日に開催した火縄銃の射撃は、長浜市の国友鉄砲研究会の方々の献身的な御協力を得ることができ、五〇〇名を越える多くの市民の方にご覧いただきました。この紙面をお借りして、鉄砲研究会の方々にあらためて感謝申しあげるとともに、展覧会に貴重な資料を御提供いただいた方々に謝意を表する次第です。なお、展覧会の観覧物は合計六、三六二名でした。

博物館では、今後ともこういった特別陳列を随時開催し、地元の歴史に密着した展示を行っていきますので、今後ともよろしくお願いします。

特別陳列
「信長・戦国・近江」報告

十一月一日（日）から二十九日（日）まで、特別陳列「信長・戦国・近江」を開催しました。この特別陳列では、織田信長の生涯に焦点を当て、天下統一を目指した彼の行動の過程で、近江あるいは大津の地がいかに重要な役割を果たしたかという観点から、実物資料一四件、写真パネル、イラスト四六点によって分かりやすく紹介したものです。

実物資料では、重要文化財の「信長記」全一五冊（岡山大学所蔵）や織田信長画像（兵庫県立歴史博物館所蔵）をはじめ、火縄銃や安土城の金箔瓦、坂本城の出土遺物、信長の朱印状などの戦国時代の古文書が主な

博物館の催し物

■ **展　覧　会**

◇「大北斎展」
（期間）三月二日（日）～四月十一日（日）

◇「伝説の歌人・小野小町展」（仮題）
（期間）五月一日（土）～五月三十日（日）

■ **講　演　会**

◇大北斎展記念講演会
（題名）未定
（日時）三月十三日（土）
午後二時～三時三〇分
（講師）永田慈生（太田美術館館長）

■ **講　座（土曜講座）**

◇（題名）正月・春の民俗行事
（日時）一月九日、二十三日、三十日
（講師）山崎和宏（本館学芸員）

◇（題名）大津京
（日時）二月六日、十三日、二〇日
（講師）松浦俊和（本館学芸員）

◇（題名）古文書入門（道中案内記を読む）
（日時）二月二十七日、三月六日、二〇日
（講師）樋爪　修（本館学芸員）
※開始時間はいずれも午後二時から（九〇分）

■ **講　座（親子講座）**

（題名）大津の歴史と文化を学ぶ
（日時）一月九日、二月十三日、三月十三日
※開始時間はいずれも午前十時から（九〇分）

詳しくは市歴史博物館へ。

博物館日記抄

8月1日
11月29日

8月1日　46回土曜講座「石器をつくる」（講師横田洋三県文化財保護協会技師）
5日　企画委員会開く
8日　夏休み子ども講座「紙芝居がやってきた」（講師平意茂氏）
20日　真野西勝寺の阿弥陀如来立像調査結果についての記者発表、稲富昭夫滋賀医科大学副学長ら来館
8月22日　夏休み子ども講座「昔の遊び道具をつくるI」（安田真紀子奈良大学助手）
29日　夏休み子ども講座「昔の遊び道具をつくるII」（安田真紀子奈良大学助手）、奈良市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会一行来館
9月1日　館の大がかりな火災非難訓練
10日　12日からの企画展に際して趙力光（西安碑林博物館）・晏新志（陝西歴史博物館）・王宏彬の（同上）の各氏随展組来館
12日　第七回企画展、日中国交正常化二十周年記念「シルクロードの都長安の秘宝」の開場式およびレセプションを開催、鮫島光治日本経済新聞社専務・奈良本辰也日中文化交流協会理事ら一三〇人出席。親子歴史講座「大津の歴史と文化」開く
19日　記念講演会「昭陵の陪葬墓とシルクロード」（講師田辺昭三京都芸術造形大学教授）・日本宗教民俗研究会開かれる
24日　新たな随展組の韓刊（陝西省考古研究所）・張崇信（昭陵博物館）・向徳（西安市文物管理局）の三氏来館
26日　展示解説「中国の都城遺跡」（当館吉水真彦学芸員）
27日　県民放送大学学生一五五人来館
10月1日　歴史文庫九冊目「近江の社」を発刊
10日　阪田宗彦奈良国立博物館工芸室長・井口喜晴奈良国立博物館考古室長・田辺昭三京都造形芸術大学教授来館。土曜講座「渡来人の集落」（講師福田敏市教委文化課技師）
11日　「シルクロード都長安の秘宝」閉幕
17日　50回土曜講座「渡来人の生活」（講師青山均市教委文化深技師）
18日　王有江中国牡丹江市副書記ら来館
20日　市写真展開かれる（25日まで）
23日　安土城考古博物館・奈良大学文化財学科一行来館
24日　51回土曜講座「渡来人のお墓」（講師田中久雄市教委文化課技師）
31日　52回土曜講座「近江の石造品について」（講師池内順一郎県湖国と文化編集長）
11月1日　第二回特別陳列「信長・戦国・近江」開場、茶会も開く
3日　国友鉄砲の実演（県警察学校グランド・五百人が見学）
7日　展示品解説（講師樋爪修当館学芸員）
8日　宇佐山城見学に一一二名参加
14日　記念講演会「信長近江を駆ける」（講師木村至宏当館館長）
18日　大津市歴史博物館協議会開催
21日　53回土曜講座「中世文書を読むI」（講師土井通弘県立琵琶湖文化館学芸員）・環境展の開場式行なわれる（28日まで）
28日　54回土曜講座「中世文書を読むII」（講師土井通弘氏）
29日　「信長・戦国・近江」盛大裡に閉幕。

博物館だより　第12号
発行日　平成五年一月一日
編　集　大津市歴史博物館
発行所　大津市御陵町二―一
大津市歴史博物館
電話（〇七七五）二二―二一〇〇㈹